

平成 29 年度 食育推進に係る実践報告書

学校名	広島県立広島南特別支援学校		
学校長氏名	重岡伸治	栄養教諭氏名	村上優子
職員数	65名	児童・生徒数	71名

1 学校における食育の現状（昨年度からの課題等）

昨年度の生活リズム調査より、朝食の摂食率は高いものの、朝食の内容については、十分であるとは言えず、朝食欠食者は固定化しつつあることが分かった。また、1年間を通じて、結果に変動が見られたのは、小学部高学年や中学部であった。このことから、食習慣や生活習慣を自分で管理し、習慣化し始める時期が小学部高学年から中学部の時期だと捉え、この時期の児童生徒に対して、重点的に取り組む必要性を感じている。

2 学校の食育に係る目標（成果指標・目標値）

- ・望ましい生活習慣の形成（学校経営計画）

6月、夏季休業後、冬季休業後の年3回生活リズム調査期間を設け、家庭との連携を図り、生活習慣や食の大切さについて指導する。それぞれの発達段階に応じた内容で、自らの生活について振り返り、望ましい生活習慣や食習慣を形成しようとする幼児児童生徒を育成する。

成果指標：幼児児童生徒又は担任による生活習慣チェックの肯定的評価。

目標値：平成28年度実績値68%をうけ、目標値を70%とした。

3 食育の目標に対する具体的な取組

【取組1】（テーマ） 教科における食に関する指導

中学部第3学年の保健体育科「生活習慣病の予防」において教科担任と栄養教諭でTT授業を行った。食育の視点は、栄養バランスのとれた食事が生活習慣病の予防となることを理解する（心身の健康）とした。栄養教諭が劣化具合の異なる2種類のホースと粘性のある液体を準備し、血管や血液に見立てて、動脈硬化や高血圧について具体的に説明を行った。体の中の様子を可視化したことや、専門性を持った栄養教諭が説明したことで、生徒は非常に興味・関心を持ち、熱心に図を書いたり、メモをとりながら、新しい言葉や内容を理解しようとしていた。栄養教諭が作業をしながら説明をし、教科担任が重要なポイントを、即座に手話で説明を加えるなど、TT授業でなければならないことであり、非常に効果的であった。



【取組2】(テーマ) 教科と関連付けた献立の工夫

今年度新たに、教科等で栽培した野菜を学校給食へ活用する取組を行った。実施に向けては、校内で栽培した野菜を学校給食で使用することで、生徒は学習意欲を高めることができるだけでなく、消費する側にとっても、生産者の顔が見えるため、感謝の心や食べ物を大切にするなど食への関心が高まること、地産地消、地場産物の活用など学校給食の目標にも沿っているということなど、校内における食に関する指導の充実のために実施することを職員に周知した。12月に高等部作業学習で栽培した大根をおでんに使用した。毎日給食時に配付する資料には、大変だった作業や収穫までの苦労とともに、大根を収穫したり、洗っている写真などを、掲載した。全員が生徒の作った大根を意識して食べ、食堂内ではおいしかったよと伝えている幼児児童生徒や、職員からほめられて嬉しそうな生徒の様子も見られた。感想欄に記入された、お礼の言葉をまとめて、栽培していた生徒たちに返したことで、来年度に向けての活動意欲につながった。



4 「ひろしま給食100万食プロジェクト」の取組について

全県統一メニュー「熱く燃えろ！！Cスープ」に合わせて、県内の特別支援学校の栄養教諭・学校栄養職員で考案した「トクトクCライス」を実施した。平成28年度は、統一メニュー「タコタコライス」に合わせて、「トクトクポトフ」を実施しており、子供たちに「トクトクシリーズ」として、意識付けられるよう取組を進めている。「トクトク」は、特別支援学校の「特」であり、たくさんの栄養が取れる「得」などの意味を込めている。

5 取組に対する成果と課題

【成果】

望ましい生活習慣の形成については、目標値70%に対し、幼稚部90.5%、小学部79.0%、中学部86.9%、高等部87.9%であり、全体として86.1%という結果で目標を達成することができた。

朝食の摂取率だけを見ると、これまで調査を実施してきた初めて、年3回全ての調査において、全学部の幼児児童生徒が92%以上朝食を食べているという結果が出ており、朝食を食べるという習慣が身に付いてきたと考えられる。

【課題】

朝食を食べるという習慣は身に付いてきたものの、全ての調査において、朝食で野菜は全く食べなかったと答えた児童生徒もあり、食事の内容については、偏りがあり、十分でないことが分かった。調査後の気付

きや振り返り欄には、「野菜をとらないといけないと思った」「野菜をとるのは、難しかった」「朝食で野菜を食べるようにする」といった、食事の内容についての回答が回を重ねるごとに増えており、意識向上は見られるが、行動の変容にまでは至っていない。

6 今後の取組に向けた改善方策について

給食時間における指導だけでなく、教科等の中でも、栄養教諭が担任等と連携して、学校給食を用いた指導を行い、日々の給食が食事の理想モデルであることを、さらに子供たちに理解させ、食生活に対する行動の変容へと結びつけたい。幼児には、食べ物への興味・関心を高める内容、児童には食べ物の種類や野菜の働きについて、生徒には食事のバランスや正しい食習慣など、引き続き、発達段階に応じた食に関する指導を実践していく必要がある。学校で学んだ内容が継続でき、生活の改善に結びつくような手立てや家庭に対する働き掛けなどを考え、保健安全部を中心に取り組んでいきたい。